

地域で育てる

子どもたちのさまざまな
居場所を訪ねます

クロモンこども食堂



灰谷知子 (幼稚園教諭)

〔所在地〕 東京都品川区北品川
2-2-7

〔連絡先〕 電話 なし
(フェイスブックあり)

品川駅から、ゴジラが映画で初めて上陸した八ツ山橋を越えて、北品川本通り商店街に入る。かつて東海道五十三次第一番の宿場町として栄えた頃と同じ道幅で、今なお多くの人々の往来を受けとめている。クロモンカフェは、黒門横丁という路地沿いの家の二階にある。入り口では、手書きの看板が私たちの訪問を温かく受け入れてくれる。

『もしかしたら、こどもだけでばんごはんたべてる？』ひとりでチンしてたべてたり、おるすばんしてる？ときどきだけど、よかつたらクロモンにおいで。あつたかいばんごはんをつくってまつてるよ。マンガをよんだり、しゅくだいしてもいいよ。テレビはないけど、いっしょにいるだけでぎつとしたのしいよ。』

「クロモンこども食堂」を始めた経緯

開店前の仕込みの合間を縫って、店主の薄葉聖子さんに話を伺った。もともと会社員だ

訪問者：灰谷知子（お茶の水女子大学附属幼稚園教諭）、上坂元絵里（同）

った薄葉さんは八年前、当時シャッターの下りる店が多く並んでいたこの地で、「品川の暮らしをもっと知ってほしい」と街の活性化を願う気持ちを胸に、クロモンカフェを始めた。こぢんまりとした間口、古く急な階段、畳敷きの居間など、民家の佇まいをそのまま利用したこの店は、当時新しく建ち始めたマンションの住人と商店街の住人とが集う場になっていった。畳の和室ということもあり、赤ちゃん連れの方も安心して足を運ぶようになってきた。



そんなある日、「こども食堂って聞いたことある？」と地域の方と話したことが転機となった。その時初めて「孤食」という言葉を知ったそう

である。子どもが親の帰宅までの時間、たった一人で留守番をする、朝作ったご飯を夜に「チン」して食べる、コンビニのご飯を買うなど。そんな社会の抱える現状を知った薄葉さんは、自分が今できる範囲でできることをしてみようと、思い立った翌日から週一日程度で「クロモンこども食堂」を始めたという。

こども食堂の開店 保育所帰りの親子連れ

開店の夕方六時を過ぎると、保育所帰りの親子が「こんばんは」とつぎつぎやって来る。八畳ほどの一部屋は、あつという間に四組ほどの親子連れでいっぱいになる。「大人1、子ども2ですね」。注文をしてからは、しばしにぎやかなおしゃべりタイム。台所からはいい匂いが漂ってくる。

最初は汁物。この日のメニューは具だくさんの豚汁だった。「熱いから気をつけて」。まずは子どもたちに来たての料理が届く。「お



箸は自分で取りに行つてね」「おいしそうー」「いただきます」。親戚の家に遊びに行つたときのよ
うな言葉が交わされる。少したつと、母親たちの料理が運ばれ

る。揚げたてのアジのフライと共に「お代わりもできるからね」といううれしい一言も添えられる。
食後のくつろぐ時間に話を聞いてみた。近所の保育所からの帰り道、親子でよく利用するとのこと。「待っていれば食事が出てくるって幸せ」と話す母親の隣では、子どもたちがゆつたりと絵本を見たり、にぎやかに遊んだりしている。調理の音、匂いに満たされる穏

やかな空間の中で、時間に追われることなく過ごすひととき。子どもたちが遊ぶ傍らで、親同士がよもやま話に花を咲かせる。こんな姿を見ていると、食事というのは、決しておなかを満たすだけではないという当たり前のことに気づかされる。そして薄葉さんの話を思い出した。

「私は温かいご飯を作つて、場を開放する。このことが、子と子、親と親との伝え合いを生み、コミュニティをつくり上げていく」

こんな光景があつた。さつきまで母親に抱き上げられていた赤ちゃんが、よちよちと歩き、隣の赤ちゃんに小さなかわいい靴下を差し出す。それを受け取つた赤ちゃんが、両手で一生懸命履く。「いつもは靴下を履くのをむずがつてひと苦労なのに」と母親が話していた。ここでは赤ちゃんも赤ちゃんも出会い、かかわるうれしさを感し、自らの意思で動き始める。

小さな親子連れの多くは、午後七時を過ぎた頃、「ごちそうさまでした」「また来ます」とつぎつぎ家路に就いていった。

小学生、中学生の来店

スペースが空いてくると、頃合いを見計らったかのように小中学生の親子連れがやって来た。常連さんは、台所に程近い場所に座り、片づけや調理に忙しく手を動かす薄葉さんや食堂のスタッフの方とおしゃべりに花を咲かせる。ごく普通の家の台所と居間との距離感。お手伝いをしたがる子どもも多いそうだとはいえ、やはり危ないので、「待っててね」と声をかけるのだが、そんな何気ない会話でも、子どもたちはとてもうれしそうにするのだそうだ。

食事が運ばれてきても、名残惜しそうにゲームを続ける子どもがいた。「食事のときはおしまいよ」。優しくもきつぱりと声をかけるの

は、偶然場を共にした大人たち。赤ちゃんをあやしなから食事をする母親がいると、隣りあった子どもが「おいしいよ」と声をかけて食べさせてくれる。薄葉さんが『子どものために』と始めた趣旨を、少しずつ肌で感じ、応援する人が増え、ここで大切に行っていることをさりげなく伝える人の輪が広がってきているそうだ。

子どもが主体 居場所は自分でつくる

こども食堂で子どもたちは、食べる幸せを、匂い、音、味など、からだ全体で感じ、自らさまざまな人にかかわっている。

「こども食堂は、子どもが主体です。そうすると、子どもは自分で居場所をつくるんです」。そう話す薄葉さんの言葉には、子どもたちにかかわるすべての人や場に通ずる、大切なことが含まれていると感じた。

(二〇一六年十一月訪問)